

大正期情愛書簡文例集の研究序説

—— 恋愛書簡文例集に注目して ——

みょう が まどか
茗 荷 円

1. はじめに

文章の種類は一般に、実用文と非実用文に二大別される。そのうち、書簡文は実用文に分けられるが、その中でも、用を弁じるのが中心の、文字どおりの実用書簡文と、必ずしもそうとは言えない、自らの情愛を述べるのが中心の、「情愛書簡文」⁽¹⁾と呼ばれる書簡文があり、いわゆる恋愛書簡文（ラブレター）は、この情愛書簡文に含まれる。

日本の近代書簡文の歴史において、大正期、この情愛書簡文の書き方を指南する書簡文例集、とりわけ「恋」や「愛」、「男女」、「悩み」などの語を冠するタイトルの文例集が、数多く出版されている（次ページ表1参照）⁽²⁾。これは大正期以前・以後⁽³⁾にはほとんど見られなかった部類の書簡文例集であり、大正という時代を象徴する資料の一つと考えられる。このような書簡文例集が多数出版された要因の一つとして、「大正浪漫」という言葉もあるように、大正デモクラシーを背景とした自由恋愛思想の勃興や恋愛機運の高まりによることが推察されるが、その他にも、文体史・文学史的な流れも大きく関わっていると思われる。

大正10年頃は、言文一致運動において「洗練された口頭語的口語文体」（山本（1971））が完成を見たと言われる時期であり、茗荷（2021）では書簡文における類似の現象を確認した。情愛書簡文例集の文例はおおむね口語文体であるが、とくに恋愛書簡文においては、例えば、「私は呪はれ、打たれ、粉微塵にされて、道端の泥の中へ、はふり出されなければなりません。それも怖くはないの、私はあなたを愛して居りますもの、名誉だの命だの、そんなもの何んで惜しいと思いませう。」（『応用自在 男女情熱の手紙』）のように、口語的であるのみならず、技巧的な工夫が見られるのが特徴である。つまり、恋愛書簡文には、「用件を伝える」のが主である実用書簡文よりも高度な文章力が求められたのであり、ここに、書簡文における口語文体のさらなる進展が見てとれるのである。

文学史的な流れとしては、明治後期に勃興し高潮を迎えた自然主義文学、その流れを汲

む私小説や、明治後期～大正期に流行した書簡体小説が挙げられ、これらのもつ性質は恋愛書簡文のそれに類似している。

以上のような背景を踏まえ、本稿ではまず、これら恋愛書簡文例集の資料紹介・観察とともに、出版の意図や資料の位置付け、役割等について、大正期という時代背景および文体史・文学史に関連させて考察を試みたい。

2. 恋愛書簡文例集の概要

大正期の恋愛書簡文例集として、管見のかぎり、以下のものが挙げられる。なお、本稿では旧字体は新字体に改める。

表1 大正期の恋愛書簡文例集

出版年	著編者	タイトル	出版社	著編者の他著作
T1	花鳥春子著	恋に悩める 若き女の手紙	紫紅者	なし
T1	熊谷為蝶編	芸者の手紙	彩文館	花柳・演芸関係読本、人情本現代訳
T2	磯野芳子編	恋ひに悩める 新らしき女の手紙	文芸出版社	なし
T2	藤原紫浪著	現代式男と女の手紙	自省堂	雑誌『顕才新誌』への寄稿
T2	手紙雑誌社編	若き人々の書ける多情多恨の手紙	岡村書店	『手紙雑誌』刊行、名家書簡資料集
T2	植松美佐男編	若き人々の手になれる恋の美文	岡村書店	少女小説、家庭小説
T2	一教師編	涙のあと 若き女教師の手紙	以文社	なし
T3	池内十八編	愛の手紙：多情多恨	名倉昭文館	美文、文章読本
T3	町田如山著	男と女のふみと文	堀田航盛館	浮世恋愛小説
T5	原田白雨編	青春のなやみ熱烈なる愛の手紙	柏原奎文堂	なし
T6	岩田烏山著	秘密の手紙	自教社	少年少女向け小説、美文模範書
T7	岩田烏山著	情の手紙	有教社	少年少女向け小説、美文模範書
T7	太田柏露著	男女 思ひのふみ	豊文館	近世物翻訳、マナーブック、現代用語辞典他
T7	春宵花人編	ラブレター	大橋正二郎	『妻にするまで』（『恋愛実物語集』）のみ
T8	永井湘南著（編）	胸に秘めたる 愛の手紙	芳文堂書店	『俳句の作りやう』、恋愛書簡文例集
T8	今村九穂著	多情多恨 新らしき手紙文	一書堂書店	なし
T8	永井湘南著	愛の文がら	芳文堂書店	『俳句の作りやう』、恋愛書簡文例集
T8	水上良作編	ペン字にて記したる 若き人々の手紙	中川玉成堂	『高岡史話：庶民の歴史』3部作のみ
T8	村瀬蕉雨著	乙女ご、ろ 花鳥余情	芳文堂書店	『近代描写一万句』（文範）のみ
T9	花上美代子編	多情多恨 愛の手紙	国華堂本店	なし
T9	大島三枝子著	恋の告白 手紙ロマンス	国華堂	なし
T10	佐藤蘭香編	近代名作に現はれたる 愛の書簡集	真珠書店	『愛の書簡文：名流作家に現はれたる』のみ
T12	佐藤蘭香編	愛の書簡文：名流作家に現はれたる	万卷堂	『近代名作に現はれたる 愛の書簡集』のみ
T12	紀室公民著	応用自在 男女情熱の手紙	好文社	文学選集他多数

これらのうち、タイトルは「恋愛」や「男女交際」を示唆しているものの、1冊の中で、恋愛の要素のないただの「悩み」や「情愛」のみの内容の書簡文が含まれているものや、「男女」でも、親族間の男女のやり取りや、恋愛要素のない男女のやり取りが含まれているものもある。現代の視点から見ると、タイトルから想像されることと内容が一致しないというのはいささか不誠実であると思われるが、これは裏を返せば、恋愛を示唆するようなタイトルの方が注目を浴びる、つまり大正期の恋愛機運の高まりや、人々の恋愛への関心の高さを示している証と捉えることも出来る。

参考までに、大正期以前と以降（昭和前期）の同類の資料を示しておく。

参考：明治期の「男女のやりとり」についての書簡文例集

出版年	著編者	タイトル	出版社	他著作
M22	花柳粹史編	男女必読思ひのかけはし	不明	都々逸集、端唄種本他
M23	記載なし	男女必読恋文虎の巻	和田文宝堂	—
M38	村瀬元代著	手紙之文：男女往復	大川屋書店	徘徊集他多数、(槐堂居士と同一人物)
M36	槐堂居士著	男女交際文範：書牘新案	聚栄堂[ほか]	交際法、作文法

これらはタイトルこそ「恋愛」や「男女交際」を示唆させるが、恋愛の要素のある資料は『男女必読思ひのかけはし』、『男女必読恋文虎の巻』の2点のみである。また『男女必読思ひのかけはし』は実用文も含まれている。

参考：昭和前期の恋愛書簡文例集

出版年	著編者	タイトル	出版社	著編者の他著作
S3	文芸研究会編 (花井サチコ著)	多情多恨若き女性の手紙	榎本書店	近松傑作集、恋愛小説他(文芸研究会)、花井サチコはなし
S8	藤間みどり編	情熱の手紙	網島書店	なし

上に挙げた『多情多恨若き女性の手紙』の後半は実用書簡文例が掲載されている。

このように前後の時期と比較しても、大正期の恋愛書簡文例集の数量は群を抜いており、時代を象徴した資料であるということが分かる。次項でこれら大正期の恋愛書簡文例集について、整理・観察してゆく。なお、今後資料については、男女間における恋愛絡みの書簡(いわゆるラブレター)を「恋愛書簡文」、それ以外で、恋愛の要素を含む書簡(2-4、2-6 参照)を「恋愛系書簡文」と呼ぶこととする。

2-1. 資料の構成——実用書簡文例集との相違

一般的な実用書簡文例集と比較した場合、その構成上の大きな特徴として2つ挙げられる。

1つ目は、実用書簡文例集の多くが文例の他、書簡文の構成・展開、文体や表記、頭語や結語、署名や宛名・敬称、脇づけといった書簡用語、時候の挨拶文、人称詞などの教示にページが割かれている、もしくは^こう頭にこれらが掲載されているのに対し、恋愛書簡文例集の場合、基本的には文例が掲載されているだけである。

2つ目は、配列である。実用書簡文例集は基本的には「祝賀、依頼、忠告、謝罪、御礼、誘引」などの用件別、もしくは季節の順に配列がされているが、恋愛書簡文例集では多くが恣意的な配列であり、されていたとしても季節で区切られているくらいである。

2-2. 著编者について——実用書簡文例集との相違

表1に示すとおり、著编者はいわゆる当時の文壇の中心である本格小説の執筆者や評論家ではなく、家庭小説家や少女小説家、実用的書籍の執筆者、風流人（粋人）等が中心である。これに対し実用書簡文例集では、明治期も含めると、山田美妙（『文例：言文一致』）、堺枯川（利彦）（『普通文：言文一致』他）、山川臥竜（直信）（『女子普通文：言文一致』）、大町桂月（『書翰文作法』他）、五十嵐力（『高等女子新作文参考書』他）、大和田建樹（『書簡文作法』他）、樋口一葉（『通俗書簡文』）、下田歌子（『女子書簡文』他）、与謝野晶子（『女子のふみ』）、三宅花圃（『玉つさ 女子消息』）などの、文壇の中心であった作家や著名な評論家、文学者、教育者等の執筆も見られる。

2-3. 書簡文例の出自

恋愛書簡文例集の文例は、その出自に注目すると、次の3つに分けられる。

- 1) 著者が創作したもの。
- 2) 编者または著者が現物を集めた（とされている（※詳細は後述））ものや、現物をベースに编者が少し手を加えたもの。
- 3) 小説の中の書簡文や作家の書簡を集めたもの。

これら3種のうち、最も多いのは2)であり、2)のうち、資料によっては、文例の後に、個人名が記されているものも見られる。これはおそらく、明治中・後期から行われていた、雑誌への投稿書簡文からの選出と見られる。

2-4. 書き手と読み手のパターン

恋愛書簡文例集の文例は、全てが意中の男女のやり取りではない。パターンとしては、男女間の他に、同性間のやり取りも見られる。男女間では恋愛書簡文が中心であるが、ある「女」が、意中の「男」の男友達や関係者に相談の書簡を送る（逆も然り）という恋愛系書簡文もある。同性間は恋愛の相談、告白、諫め、慰めなどが中心である。

2-5. 書簡文のやり取りのパターン

様々なパターンが見られるが、主なものを挙げると、以下の4パターンである。

- 1) 一通完結
- 2) 往復1回
- 3) 往復複数回
- 4) 初めから終わりまで同一人物どうし、または複数人の往復

4) は、書簡文の形式を借りた「長編恋愛読み物」であり、いわゆる書簡体小説に近いものである。

最も多いのは1)、2)であり、1)～3)が混在している文例集もある。4)は少数である(例：『涙のあと 若き女教師の手紙』、『恋に悩める若き女の手紙』、『愛の文がら』)。

2-6. 書簡文の内容

内容は様々であるが、概括すると、以下の内容が中心であるといえる。

- 1) 道ならぬ恋（家庭を持つ妻／夫が外の恋人に送る）の男女の書簡
- 2) 身分違いの男女の書簡（相思相愛であるが家の事情や見合い等で別れなければならぬ、または決心がつかず悩むなど）
- 3) 連絡が途絶えた、もしくは別れた（フラれた）相手へ送る書簡
- 4) 最後の別れの書簡
- 5) 相手の気持ちを確かめようとする書簡
- 6) 相思相愛の男女間のやり取りや、相手への想いを募らせた書簡
- 7) 恋愛・結婚に関する悩み相談や告白

1)～6)は男女間、7)は同性間で中心の内容である。なお、喜びや幸福に満ち溢れた内

容は少数であり、基本的には「悩み」「迷い」を含むものが中心である。またとくに「道ならぬ恋」に関しては、幸福な結末となる内容はごくわずかしが見られない。

2-7. 出版の意図と創作性

多くの恋愛書簡文例集には、「序」もしくはそれに相当する箇所に、出版の意図が述べられている。またこれらの文例の出自や創作性についても言及されているのが特徴である。本項ではその一部を抜粋し、意図と創作性について見てみたい（傍線は筆者による）。

【例 1】即ち、人其者には個性といふ侵し難ひものがあるのである。（略）個性發揮の現代、最もよくそれを実行せるものは青年子女である。其の個性發揮を具体的に他に示すものは、言語なり動作なりであるが、言語動作は其場限りで消えてしまふから、茲に永久に彼等の個性を示し且残すものに書簡がある。編者はこの意味に於いて現代の、若き男女の手紙を、大なる努力と苦心によつて集めて見た。即ち本書である。

現代の若き男女が如何なる思想を有してゐるか如何なる生活をしてゐるか。この書を一読すればよく分かる。（略）忌憚なく個性を發揮せる現代青年子女の秘密手紙。果して何を読者に教るであらうか。

（「小言」『恋ひに悩める 新しき女の手紙』）

【例 2】私は万年筆を擱くとホッとした。そして淡い誇を感じた。それは一卷数十編、悉く根柢を事実の上に置いて些の空想を混ぜなかつたからだ、虚偽を書かなかつたからだ。男の手紙、女の手紙、其人々の身分と境遇に依つてそれ／＼内容を異にしてゐるけれど、私は永ひ間に蒐めた、活きた、生々しい材料を土台として、夫等の人々の境遇から身分から周囲の事情やらに、心から同感し同情し、其人の気分となつて如実に描かうと苦心しながら筆を執つたのだ。そして、其人々の真実の叫びを読者へ再現しやうと努力したのだ。

此^{これ}点が、本書を公にするに当つて、著者たる私の^{プライド}誇とする所であると同時に、又偽らざる告白であるのだ。

（「自序」『秘密の手紙』）

【例 3】世に情熱の言葉ほど尊い歓楽はありません。今、若き男女の心をそのまゝに枝に鳴く小鳥よりもやすらかにたのしく、たつ糸遊^いよりもよりも尚ほかる／＼かるやかに（ママ）綴る。之を読む人、その胸に紅の血潮がみなぎるならばその血を、枯れたる他の胸に注ぐを忘れるなかれ。もしまた不孝にして既に血枯れ熱さめて

居る人ならば、之れによりて新たなる薪を加へて新たなる焔に炎々天を焦すべき
である。(略) あまやかなるその言葉、これをもつて世界をつゝむ時、常春の悦び
は人間の一切の醜を蔽ひ去り得るであらうものを。

(「序」『胸に秘めたる 愛の手紙』)

- 【例 4】又他の親しき友は斯う言ひました。『言葉には偽りが多いが、手紙には嘘はない。
真実の迸りが文字になつて現はれるのである』と、(略) 手紙は実に真実の叫びを
打明ける場所であります。

茲に集めた『愛の手紙』は私の知人□(判読不可) 篋底に秘められたものを、借り
集めて掲げたのであります、中には其文章に多少修飾を加へたものもありますが、
多くは原文の儘で、その手紙を書いた人々の、悩み歎び、悶え、悲しみが文字の上
に瞭々と現はれてゐます。(略)

私が、此書を著したのは、人に人の心を触れしめやうとするのに外ならないの
です、

人は人の心の底に潜み誠を知つて、始(ママ)めて世の中実相□(判読不可) 言ふ
ものを知る事が出来るのです、世の中の実相を知つて始めて人間として立つて行く
事が出来るのです。

私は斯う言ふ心持で、此書を著したのはです。

(「巻頭に」『多情多恨 愛の手紙』)

- 【例 5】『ラブレター』私は此書を、私の青春の墓に葬りたい。

しかし、此一編に含んだ感傷の夢は、年若い男女の方に対して、ある慰藉を与へる
に相違はない。

其儘反古にするのも残念だから、よろこんで書肆の注文に応じ、此小冊子を愛す
る、天下の若い人々に深謝する。

(「小序」『応用自在 男女情熱の手紙』)

本書は、全編ラブレターなり、従来のありふれたる書と異なる点は、総合して見れ
ば、殆ど、一編の手紙小説を見ゆる点にあり。

本書の材料は、いろ／＼の参考書より精選して、小冊子を形かたづくれるものにして。
一一其出所を明記せざるは、簡潔を重んじたるがためなり。

読者よ！ 乞ふこれを諒せられよ！

(「はしがき」『応用自在 男女情熱の手紙』)

- 【例 6】峻烈なる現実の上に立ちて新しき夢に生きんとする多情多恨の若き人々よ。(略)
 この書は、御身等が自ら抑へんと欲して抑ふる能はざる胸底の秘奥を披歴するに
 当りて、最も自然なる形式として選びし手紙のかず―を集めたるもの。請ふ暫
 く歩を止めて、その自らの胸に通へる若き心の脈拍が、此等の手紙の字々句々の
 間に、勇ましく鼓動する響を聴かずや。多情多恨は御身等の生命なり。
 (「序」『若き人々の書ける 多情多恨の手紙』)

- 【例 7】『現代的の文例を一つ蒐集めてくれないか』と□□(判読不明)君からの注文であ
 った。『作例を各家の文章から攪□(判読不明)してもいいか』と私が訊いた。『そ
 れぢゃ面白くない。(略)消印の捺してある中から蒐集の方が面白い。よしんば用
 語や修辭は拙くつても書いた心境が浮いて出てゐる。其積りで編纂を頼みたい』
 こんな按排で此書を編して見た。成べく簡潔で力強い計りを擇つた積りである。
 (「自序に代ふ」『男女 思ひの文』)

以上の例から、まず出版意図・目的については、

- 1) 現代人、とくに若者の個性や思想、悩みなどについて、その真の心の叫びや抑え
 られない胸底の秘奥を知る。
- 2) 人々の心の触れ合い。
- 3) 世の相実を知り、人間の鍛錬に役立たせる。
- 4) 情熱の言葉(尊い歓楽)に触れることによって、悦びを享受する。
- 5) 書簡体小説のような、「読み物」としての楽しみ。

などが考えられる。

編者または著者における創作性については、「男女の手紙を、大なる努力と苦心によつて集めて見た」「消印の捺してある中から蒐集る」「多くは原文の儘」などと述べられているが、出所は明らかにされていない。また、「文章に多少修飾を加へたものもあります」「参考書より精選」「活きた、生々しい材料を土台として(略)真実の叫びを読者へ再現しやうと努力」したものもある。これらのことから、書簡文の出自に関する言及は、2-3.で述べたように文例の最後に個人名の記載があるものは多少の信憑性はあるものの、基本的にはより現実感・現物感を出すための演出であり、実際は何らかの資料、もしくは雑誌に投稿された書簡文などを下敷きにして編者または著者が手を加えたものであると考えられる。

2-8. 文体・表現における特徴

まず文末文体については、男女ともに、多くが口語文体⁽⁴⁾の敬体（ですます調）で書かれているが、中には敬体と常体の混合や常体のみのもが見られ、これは実用書簡文例集との大きな違いである。書き手が女性の場合は、文末に「てよだわ言葉」の使用も目立つ。書き手が男性の場合、常体で書かれていることも多く、いわゆる「書生言葉」の使用も見られる。

表現については、資料により多少の違いはあるが、おおむねどの資料でも冒頭に述べたとおり、修辭や技巧、いわゆる「美文」的な要素も多く見られる。また、「私もうどうなつてもいいと思ひますわ。貴方にお目にかゝる度に私のハートは燃えて、どうする事も出来なくなりました。(略)私にすべてを捨てさせる恋よ。」(「避暑地にて (三信)」「胸に秘めたる 愛の手紙」)、「函嶺に錦織りなす紅葉のやうに、赤い赤い御心を持つておいでならば、妾が蔦屋に滞在してゐる中に、此地へ御いで遊ばせ。そしてお互ひの心臓に湧き返つてゐる血のやうな紅葉を見やうではありませぬか。」(「紅葉の箱根」『恋の告白 手紙ロマンス』)というような、【例3】にある「情熱の言葉」と思われるもの、「あゝ、きのふ迄のやさしく情け深かつたあなたが偽りか、今の無常冷酷獣の如きあなたが誠か。捨てられ、残されたこの怨恨多い私の半生は、ただたゞ返らぬ悔みと憤怒とに泣く涙あるのみだ。」(『秘密の手紙』『失われた恋』)のような欧文直訳体なども散見される。その他には記号(！、？)や「あなたの御手が、妾の頭くびに巻きついた(ママ)を感じた時、妾の脳髓の底にあるものが響きました——忘れないで頂戴な——永久に……」(「河鹿鳴く。握手の後」『応用自在 男女情熱の手紙』)のように三点リーダーやダッシュが多用されているのも特徴である。

なお、これら修辭・技巧の詳細な分析・検討は紙幅の都合上、別稿に譲る。

以上より、恋愛書簡文例集は、大衆性や娯楽性を含み、書簡文の形式や模範性よりも内容や表現に重きが置かれていると考えられる。また気持ちを直接的に細叙できるという口語文体の特長が非常に生かされているものである。これは従来の、型に嵌まりがちな候文体では不可能であったことであり、口語文体という新しい文体の可能性や有用性を示したといえよう。

最後に、恋愛書簡文例集の中から、その一編全文を示しておく。

【例8】 ^{わたし}妾が今迄張り詰めた心持が、俄かに気抜けがしたやうです。がっかりしました。

本統に妾は、何んといふ初生な女でせう。あなたのために、本統の涙を流す人

は、此広い世の中に、私以上に幾人もあつたでせうか。

人間は若し、皆打明けて、否皆打明けた心さへ持つて居たら、正直に妾の胸を通ずる勇氣と、人間の凡てが、自分の胸を通じ合ふ習慣をさへ持つて居たら、あなたゝつてあの方にとられないで済んだものと、つまらないことだと考へながら、何となく妬ましいやうな気がしてなりません。

さらば〇〇さま ― あなたのために、失恋の歎きの淵に沈んで居る可愛い女のあつたことを、あなたのお胸に問ふて見て頂戴な ― つまらない世の中ですわね…………

(「短夜。取られた恋人へ」『応用自在 男女情熱の手紙』)

3. 時代背景との関連性

本節では、大正期の社会的背景や風潮と恋愛書簡文例集との関連性について整理してみたい。

3-1. 大正デモクラシー

立身出世を重んじ国家主義・家族主義傾向が強かったとされている明治時代に対し、大正期は、「大正デモクラシーを背景に、個人を尊重して自由を重んじる風潮があらわれ」(石川 (2009)) た時期である。また武者小路実篤・志賀直哉らの「白樺」の運動、平塚らいてうらの「青鞥」の運動は、いずれも抑圧された人間性の解放をめざしたものであった(『国史大辞典』)。それは人々の「発言」にもおよび、書簡文においても、「真の心の叫び」や「抑へんと欲して抑ふる能はざる胸底の秘奥」が表されるようになった。それらは内容にとどまらず、表現形式にも影響を与えた。「型」を重視した候文体から脱却し、自由で開放的な口語文体での表現がなされるようになったのである。これは恋愛書簡文に限らず、全ての情愛書簡文に言えることであり、情愛書簡文例集はこれを広く共有する場の一つであったと考えられる。

3-2. 自由恋愛と結婚、恋愛機運の高まり

大正デモクラシーによる自我の目覚めは、「自由恋愛」にも反映した。石川 (2009) には、明治後期～大正期にかけて、自由恋愛を実践した文化人や進歩的な人々のあいだに起きたスキャンダル(情死、後追い自殺、駆け落ち、姦通罪、出奔など)が世間を賑わせたこと、また厨川白村が発表した『近代の恋愛観』は、恋愛至上主義を説き、世に恋愛論ブームを巻き起こし、男女の交際での自由恋愛は是か非か、感心は高まったとの言及がある。いっぽうで中村 (2017) では、「当時は結婚に対する日本人の考え方が変化していた

時代であり、恋愛事件は単なるゴシップである以上に、女性の生き方や結婚制度に問題を投げかけるものでもありました。」と述べられている。

とはいえ、これら自由恋愛を実行したのはごくわずかな「文化人や進歩的な人々」であり、一般的には恋愛と結婚はイコールではなく、親が決めた相手との結婚が通常であった。図1は「結婚年次別にみた、恋愛結婚・見合い結婚構成の推移」（国立社会保障・人口研究所）であり、統計は昭和10年からであるが、グラフの動向から、これ以前の大正期においても見合い結婚が主流であったことが推測できる。

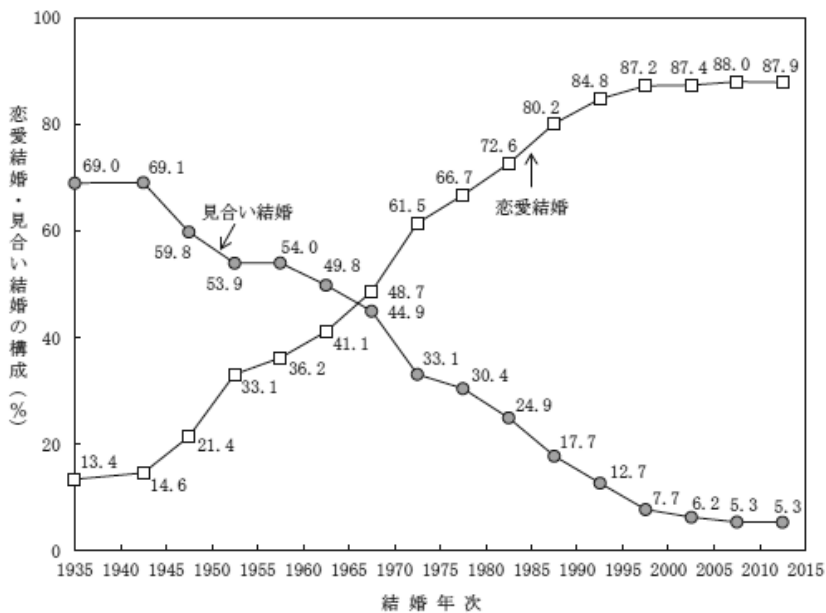


図1 結婚年次別にみた、恋愛結婚・見合い結婚構成の推移

このようなことから、一般の人々の自由恋愛への関心は高まりつつも、現実には旧来の結婚観が色濃く残り、自由恋愛やその先の結婚はあくまで憧れや想像に留まっていたことが推察される。

3-3. 身の上相談の興隆

身の上相談の先駆は、明治38年『都新聞』（現在の『東京新聞』）の「相談の相談」とされている（矢崎（2013））が、大正期ではそれがさらに多数の大衆媒体でも行われるようになった。『読売新聞』（大正3年5月2日）に、「一身上の出来事、たとえば結婚、離

婚、家庭のわずらい、及び精神上の煩悶、婦人の職業問題等につき、男女に関わらずすべての思案にあまることのご相談相手となり、及ぶかぎりの力をいたしたいと存じます。」とあり、多岐に渡る悩み相談が行われていた。また『主婦の友』『婦人公論』『婦人倶楽部』などの婦人雑誌による「身の上相談」「座談会」「手記」なども盛んに行われた。岩見(2014)はそれらについて「読者一人一人が相互作用しあう場である、『身の上相談』と『手記』は、恋愛、友情、結婚の手ほどき、また打明けにくかった性の悩みや、夫婦関係、嫁姑問題、教育、子育て、職場問題、そして美容相談など、衣食住もふくめた生活すべてにかかわるものである。」と述べている。これら身の上相談が盛んとなった背景について、カタログハウス(2002)は、『身の上相談』は、大正デモクラシーの理想の1つである「自由・個性の尊重」において、理想(自由恋愛・自由結婚、女性の社会進出、生きがい探し)と現実(古い価値観との衝突、自己表現・自己実現の困難、差別への憤り、自由ゆえの責任増大)とのギャップに悩む大衆への救済策であった。」と解釈している。

身の上相談のタイトルには、『読売新聞』では「理想に合わない許婚」(大正3年12月3日)、「上司の娘か下宿の娘か」(大正5年6月20日)、「愛のない夫に耐えかねて」(大正6年9月3日)、「恋をとるか友情をとるか」(大正8年1月28日)、婦人雑誌では「自由恋愛者の失敗(懸賞当選発表)」(『婦人公論』大正10年10月1日号)、「愛する人と結婚し得なかつた婦人の悩み」『主婦之友』(大正12年6月1日)、「去就に迷ふ男女の相談」『主婦之友』(大正14年2月1日号)、「恋に泣く男爵令嬢に答へて」中島徳蔵(『婦人倶楽部』大正15年3月1日号)などの恋愛・結婚に関する悩み事も多く見られる。この点について、石川(2009)は、『自由恋愛』から発展し、婚姻に至る『自由結婚』は、時代を先取りする点では注目」されていたが、これら婦人雑誌においては、『自由結婚』のマイナス面が強調され」る傾向にあったと述べている。

以上のことと恋愛書簡文例集の関連性を考えると、おそらく文例は、自由恋愛や自由結婚が注目されるものの、実際にはマイナスのイメージが強かったという風潮を汲んだ上で、新聞・雑誌等に投稿された身の上相談を材料の一つとし、それを脚色し、技巧を加えた「書簡文」という形で創作したことが推測される。身の上相談は書き手と読み手が「相談者」と「回答者」であるとはいえ、一般公開されている。したがって、「皆に読まれてもよいような書き方」であり客観性も意識されていると考えられる。それに対して恋愛書簡文は、書き手と読み手のみのやり取りという設定のため、より機密性が高く、直接的・主観的である。そのため読み手は当事者意識を喚起させられたり、臨場感を得られたりするであろう。

書簡体のもつ一番の特徴は、渡部(2016)によれば、「私的内的心情を告白・記述することに長けているという点であり、語り手＝登場人物であることが内面的告白を効果的に

するのである。読み手は作者の介在抜きで人物の直接の表自に触れることとなり、〈私〉の赤裸々な心の秘密や感性の震え、些細な日常のエピソードまでをも共有することができ」ることである。また、「数名の人物による手紙のやりとりによって複雑な構成が生まれ、同一の事象にいくつもの視点や解釈が提出され、総体主義的価値観を読者に植え付ける、という特徴もある。」とされている。

恋愛書簡文例集は、人の恋愛を覗き見るような愉しさといった娯楽性の他にも、自由恋愛や道ならぬ恋愛に対する願望のある男女の憧れや空想の受け皿としてだけでなく、自由恋愛や恋愛スキャンダルの擬似体験をさせる役割も果たしていたのではないかと考えられる。

4. 文体史上や文学史上との関連性

本節では、恋愛書簡文例集に限らず「情愛書簡文例集」全体から、近代の文体史や文学史の流れを背景に、これらが多数出版された要因について見てゆきたい。

4-1. 言文一致運動との関連性

先述したとおり、言文一致運動が完成を見たのは、大正10年頃である。大正期、書簡文においては、従来の候文体が減少し、口語文体が急激に拡大・普及していった時期であるが、当然ながら「実にまだ試験時代の未成品」（『新書簡文』大正6年）などと、その未熟さを指摘する言及も見られた。茗荷（2021）では、明治後期～大正期において、いわゆる洗練された「口頭語的口語文体」の発達過程と見られる口語文体の存在について指摘した。

心情を直接的に、また細部に渡って述べられるというのが口語文体の特長であるが、旧来の候文体は「簡にして明なる」のが特長であり、上述したような口語文体の特長は持ち合わせていない。候文体に慣れ親しんだ者にとっては、口語文体という新しく成った文体で心情を事細かに綴るといのは、用件を述べるのが目的の実用書簡文よりも困難であったと考えられる。また明治20年代頃から盛んに出版された書簡文例集は、候文体が中心であったし⁵⁾、時期が下って「言文一致」を意識した口語文体専用のものが出版されたとしても、その必要性から実用文が中心であり、そこに+αとして情愛書簡文が掲載されている程度であった。このような状況下、情愛書簡文例集は、口語文体での情愛書簡文の書き方の先導役のような役割を担っていたのではないかと考えられる。実際に、「(略) 情愛手紙を満足に書かんとするには矢張り情愛といふものを養はねばなりません。(略) 一番の早や道は多数の女性の情愛の発露を能く注意して観るといふことがよいと思ひます。」(『若き女

の情愛手紙』大正5年)というように、「情愛を養ふ」ことを上達の秘訣とした上で、その方法として情愛書簡文を実際に読むことが挙げられている。

4-2. 修辞・技巧

小説文系統の文章においては、明治末期からの言文一致体を基本とする自然主義文学の勃興・高潮により、「無技巧」が奨励され、修辞・技巧に対して否定的であったとされているが、マッシミリアーノ(1996)は、その自然主義作家の代表とされる田山花袋の『美文作法』(明治39年)や『小説作法』(明治42年)などにおける記述を根拠として、「自然主義は修辞を一切排除するという見方が当時の文壇の誤解によるものであった」と指摘している。また言文一致体での修辞の必要性・重要性を主張していた島村抱月は「新文章論」(明治44年)で、旧修辞学について「旧来の修辞学は装飾いわば形式だけに重点を置いた」とし、今後は新しい修辞学として「内容たる感想の行くがままに適応せんとする柔軟性、此の柔軟性を最も自在に發揮する工風が即ち修辞であり、技巧である。」と説いた。マッシミリアーノ(1996)は、抱月のこのような考えに対し、「形成されつつある新しい日本語は新しい修辞を必要としていた。よって旧修辞学を理解した上で、新しい修辞学及び修辞を工夫していかなければならないことも抱月によって明らかにされた。」としている。

修辞学そのものについては、「レトリックに焦点をあわせて体系的に研究した修辞学は、明治時代に隆盛を誇ったが、大正時代には早くも衰微の兆しをみせた。」(『日本大百科辞典』)とされ、その理由として、文章技巧よりも内容が重要であると考えられ始めたことが挙げられている。また、「演説法として導入された修辞学は文章の問題に及び、徐々に比喩理論に限られていった。そして比喩理論に限定されることで修辞学は下火になっていった。」という(マッシミリアーノ(1995))。

実用文系統の書簡文においてはどうかであったか。田山花袋『美文作法』(明治39年)では、花袋は「美文」を「一種独特な美しい花やかな文章」と定義し、書簡文については、「書簡文は余り多くの美文の特色を帯びて来ると、其目的を失ふことがある。」とした上で、「けれど金釘流のつつおいつよりも、流暢なる文章が何れ丈先方の胸を動かすかは言はでものこと、美文の素養が少しでも其中に加はると、先方の胸を動かす点に於て甚しく利益がある。であるから、余り美文を濫用すると其本来の目的を失ふ恐があるが、さりとてそれが全然書簡文に必要が無いと言ふことは無論出来ぬ。」と述べる。

五十嵐力『新文章講話』(大正5年)は、「詞姿を用いるに当たって注意すべき点」として「情感の文に用ゐるべくして知解の文に濫用すべからざることである。」と述べている。また書簡文の例文が多数掲載されている五十嵐力『高等女子新作文改訂版 第3巻』(大正

14年)では、修辞大要として3章分のページが割かれ、「修飾論」として、比喻を中心とした在来の修辞学を13種挙げている。とはいえ、「之を手引にして悪いといふ筈はないがなまなか斯様なわざとらしい規則に拘泥すると、折角の活きた思想を殺して剥製のやうな死文を出来す恐れがある。」「知つて用ゐる以上は、之れを使役すやうに、同時に使はれぬやうにせねばならぬものである。」との注意書きもある。

書簡文例集『新しき婦人の手紙』(大正8年)では、「文章が、読む者に好感を与へ、喜悅を与へ、感興を与へ、或は感激を与へ、興奮を与へる事は、一に行文の如何にある。それが為に文章の組立の如何を考へ、云ひ廻しその如何に思ひを練る事、是れ即ち云ひ換へれば技巧の研究である。技巧もあまりに凝らし過ぎると、却つて鼻について気障となるが、文章をして効果を大ならしむる為には、矢張り或る程度までの技巧は必要である。(略)要するに文章の效果に心を注ぐ事、これが即ち技巧の要領である。」とあり、この後、簡潔法、比喻法、举例法、誇張法、美化法、臚化法、反語法、詠嘆法、対照法、挿辞法、漸層法、反復法、接続法(接続詞の挿入)、省略法など、16種余りを紹介している。

また『新らしい手紙辞典』(大正12年)では、言文一致体の技巧の工夫として、以下のやうに苦痛を表す文例(抒情文)を2例挙げ、比較している。

【例9】私は一人で散歩する度毎、自分の苦しい悲しい境遇が考へられてはらぬ、殊に夜中一人で淋しい道を歩くときなどは、一層強く感じられる、どうして私はこれだけ不遇なのであらう、自分の望み総てが鴉の嘴のその様に喰ひ違つて何一つとして達しられない、で私は何日も強く煩悶する、私の胸は張り裂ける程、苦しくてならぬ

このような例を、「幾何か雅致とか華美とかがあつて面白い、けれどもこれではまだ人の感情を惹起することが甚だ弱い」とし、「もの(ママ)と強い感動を与へる」例として、次の文例を挙げている。

【例10】私は何日でも一人で散歩する、散歩する度毎に強い悲しみをする、殊に野も山も森も町も隈なく照らされた、美しい月夜の晩一人で淋しく散歩すると一層強く煩悶する、噫!! 好い月だ、噫!! 清い月だ、月はこの様に清いに私の心は何故に濁れて居るのだらう、(略)私は月が羨しい、彼の清い美しい月の——その様に私の心も清く美しくありたいものだ、(略)噫!! 私は苦しい、私のこの強い鋭い苦しみはどうしたら解決されるであらう

そして「かう云ふ筆法で書けば、美しい文章が出来、而かも人を感動せしめることが出来るのである」としている。この【例 10】のような修辞は抱月の唱えたいいわゆる「新しい修辞」の例なのではないかと考えられる。

マッシミリアーノ（1995）は、大正期には西洋修辞学のいわゆる日本化過程が始まったことを示す点として、a) 作文教育への応用が中心となったこと、b) 国語国文学への応用が実施されたこと、c) 文壇での修辞論対無修辞論の対立が克服されたことの 3 点を指摘している。この中の、とくに「作文教育への応用」が、情愛書簡文においても実践されたと言えよう。

以上のように、書簡文において、とくに情愛書簡においては修辞・技巧への注視、関心の高まりが見て取れ、「凝らし過ぎ」と逆効果ではあるが、一定の文章効果や必要性を認めている。

先述したとおり、大正期の情愛書簡文は、言文一致体で書かれているものが多い。そのような書簡文においても、「野卑、締まりがない、含蓄に乏しい」（島村抱月「言文一致の三難」明治 35 年）という、言文一致の弊害を克服するような様々な試みはされており、その一つが修辞・技巧の修練・熟達であった。情愛書簡文例集は、実用文系統におけるそれらの試行や修練の場でもあったと考えられる。

4-3. 自然主義文学・私小説による告白性

明治末期に勃興し、その後文壇最大の流派となった日本の自然主義文学は、西洋のそれとは違い、現実を直視してそれをありのままに描き出すこと、自己の告白や懺悔などに主眼が置かれた。それはやがて作家の身の狭い事実偏重と告白性とを特徴とした文学として発展し、大正期に全盛となった「私小説」と呼ばれる日本独特の小説形式の土台を用意したとされている。情愛書簡文、とりわけ恋愛書簡文や恋愛系書簡文は、書き手が心境を吐露し、煩悶し、受け手に訴えかけたりすることが多く、またときには身近な人物に私生活（自分の恋愛体験など）を告白する。これらの性質は「自然主義文学」や「私小説」の持つ性質に類似しているといえる。

文壇におけるこのような潮流も、大正期における恋愛書簡文例集を含む情愛書簡文例集の多数の出版につながったと考えられる。

4-4. 書簡体小説の流行

日本における書簡体小説の流行について、渡部（2016）の概要を示すと、以下のようになる。

日本の書簡体小説には、編者不詳『堤中納言物語』（平安時代後期）中の「よしなしご

と」、井原西鶴『萬の文反古』（1696年）からの系譜があるが、近代以降のそれらは、明治維新による西洋文学の流入が軸となっている。書簡体小説は17～18世紀ヨーロッパで大流行し、その代表的な作品として、『若きウェルテルの悩み』がある。日本では100年ほど遅れてこの『ウェルテル』が翻訳され⁶⁾、その際には「ウェルテル熱」という言葉が流行したほど当時の文壇に影響を与えた作品とされている。同時に書簡体小説の流行が起こり、明治30年代から大正期にかけて多くの書簡体小説が書かれた。有島武夫の書簡体小説『宣言』（大正5年）はちょうどその頃に書かれた作品であり、多少ながらも『ウェルテル』の影響を受けている作品である。

大正期の恋愛書簡文例集は、「一編の手紙小説を見ゆる点にあり。」（【例5】）とあるように、小説としての性質も持ち合わせており、この時期の書簡体小説の流行に乗じて多数出版されたであろうことも推測される。その他、一編全体が書簡形式による書簡文体小説に、国木田独步「第三者」（『文章倶楽部』明治36年10月）、近松秋江「別れたる妻に送る手紙」（『早稲田文学』明治43年4月～7月）、谷崎潤一郎「ラホールより」（『中外新論』大正6年11月）、「富美子の足」（『雄弁』大正8年6月～7月）、「アヴェ・マリア」（『中央公論』大正12年1月）等があり、書き出しと末尾の数行以外は全文が書簡体の作品に芥川龍之介『二つの手紙』（大正6年）が挙げられる。なお谷崎の書簡体小説は全4作品中3作品が大正期に発表されており、このことから大正期における書簡体小説の流行の一端が見て取れる。

また上述した作品は、あくまで純文学とされているものである。恋愛書簡文例集は、これらを大衆化したものであり、そのような意味では「大衆的な恋愛読み物」という見方も出来よう。

5. まとめ

以上、恋愛書簡文例集を中心に、資料観察とともに、その出版の背景や位置付け、役割等を時代的潮流と、文体史・文学史に関連させて整理してきた。その要点をあらためて示せば、以下のとおりである。

恋愛書簡文例集は、大正という新しい時代において起こり得た現代人の様々な悩みや思想、およびそれにとともなう新しい「表現」の発露としての場所であった。それは文体史的・文学史的な潮流と重なり、多くが口語文体による「書簡体」という形式を取って発表された。書簡体という形式を取ることによって、当時は注目されていたものの、否定的な風潮が強かった自由恋愛・自由結婚、さらには恋愛スキャンダルなどの、臨場感あふれる「擬似体験」も可能となった。その後の時代的な変化を考えれば、大正期における恋愛書

簡文例集の流行は、この時期以外では起こり得なかったことであろう。そのような意味で、これら恋愛書簡文例集は、大正期を代表する史料の一つとして注視に値するものと思われる。

情愛書簡文例集全体として、文体史上的な観点からもう一つ書き留めておきたい点は、情愛書簡文例集は、明治30年代後半から徐々に広がりを見せ大正期に拡大・普及していった口語体書簡文における、さらなる達成・成熟の軌跡であるということである。そこには小説文系統の言文一致体と同様、口語体書簡文と「新しい」修辞・技巧との調和への意識・挑戦もうかがえるからである。

本稿は前述したとおり紙幅の都合上、情愛書簡文や恋愛書簡文の修辞・技巧についての詳細な調査・分析に立ち入れなかった。次稿ではそれについて検討する。

注

- (1) 『若き女の情愛手紙』（大正5年）には「情愛手紙と実用手紙との異なる点」として、「情愛手紙と実用手紙とはその内容や趣きを全然、異にして居ります。情愛手紙は自分の情愛を述べるといふのが目的でありますが実用手紙は余事はさて置いて自分の用事を達するといふのが目的であります。（略）情愛手紙は必ずしも簡潔を必要と致しません。下手の長談議にわたらないやうに或る程度まで自分の情愛を細々と叙る必要があります。」とあり、これを本稿での「情愛書簡」の定義とする。
- (2) 表1は、情愛書簡文例集の中で、全通が恋愛要素を含む書簡文のもの、もしくは恋愛要素を含む書簡文が多数掲載されているものを選ったものであり、これらを本稿では「恋愛書簡文例集」と呼ぶ。
- (3) 本稿における時期区分は、社会的背景から区分をした茗荷（2017）に依拠し、明治中期（明治25年前後～明治34年）、明治後期（明治35年～明治45年）、大正期（大正元年～大正15年）、昭和前期（昭和元年～昭和11年）、昭和戦中期（昭和12年～昭和20年）とする。
- (4) 候文体や文語文体も、少数ではあるが見られる。
- (5) 茗荷（2017）では、女性用書簡文例集における口語文体の文例数が候文体の文例数を上回ったのは昭和前期であることを指摘した。
- (6) 渡部（2016）に『『ウェルテル』のほぼ全貌を伝える抄訳は、1891年7月23日から9月12日まで「山形日報」で連載された、高山樗牛による『准亭郎の悲哀』であった。その後にも翻訳の刊行は続き、大正期に入ると秦豊吉その他の訳でいっそう普及した。」とある。

参考文献

- 五十嵐力（1925）『高等女子新作文改訂版 第3巻』大日本図書
 石川桂子編（2009）『大正ロマン手帖』河出書房新社
 岩見照代監修（2014）『『婦人雑誌』がつくる大正・昭和の女性像 第1巻』ゆまに書房
 カタログハウス編（2002）『大正時代身の上相談』筑摩書房
 多恵春光（1919）『新しき婦人の手紙』日本評論社出版部
 田山花袋（1906）『美文作法』博文館
 手紙研究会編（1923）『新しい手紙辞典』東山堂書店

- 中村圭子（2017）『命みじかし恋せよ乙女 大正恋愛事件簿』河出書房新社
- 穂浪尚文（1916）『若き女の情愛手紙』岡本増進堂
- マッシミリアーノ・トマシ（1995）「島村抱月における修辭採否の問題」『日本文学』44（2）
- マッシミリアーノ・トマシ（1996）「明治大正時代における日本の修辭学研究」名古屋大学博士学位論文
- 茗荷円（2017）『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう
- 茗荷円（2021）「近代女性書簡文口語体化の契機と過程」『論究日本近代語 第2集』勉誠堂出版
- 森岡健二（1991）『近代語の成立—文体編—』明治書院
- 矢崎千華（2013）「『身の上相談』における回答の言語編成：専門性によらない回答実践を中心に」『関西学院大学先端社会研究所紀要』＜10＞
- 山本正秀（1971）『言文一致の歴史論考』桜楓社
- 渡部杏美（2016）「書簡体小説研究：『若きウェルテルの悩み』と『宣言』の比較から」『富大比較文学』＜8＞

参考 URL

国立社会保障・人口研究所「2015 年社会保障・人口問題基本調査（結婚と出産に関する全国調査）現代日本の結婚と出産」
http://www.ipss.go.jp/psdoukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf

付記：本稿は、表現学会広島例会（令和元年度第1回）での口頭発表に加筆・修正を加えたものである。本稿を執筆するにあたり、広島大学柳澤浩哉教授にご指導を賜りました。この場を借りて、感謝申し上げます。